郷土史への扉

西郷隆盛と霧島 その❶

明治維新から一五〇年に当たる平成三十年のNHK大河ドラマが「西郷どん」に決まりました。来年、平成二十九年は国内最後の内戦「西南の役」から一四〇年の節目の年でもあります。

今回から西南の役と、明治維新の立役者である西郷隆盛にスポットを当て、霧島との関わりについてシリーズで紹介します。

西郷隆盛の肖像画（尚古集成館蔵）

西郷隆盛とは

西郷隆盛は、文政十（一八二八）年に鹿児島の下加治屋町の下級武士であった西郷吉兵衛の長男として生まれました。西郷の活躍は、安政元（一八五四）年に時の薩摩藩主・島津斉彬の※庭方役に抜擢されたことから始まります。庭方役となった西郷は、低い身分ながら斉彬の近くに仕え、頭角を現わしていきました。

その後、幕末から明治初頭にかけて江戸や京で活躍し、大久保利通や木戸孝允と並び、「維新の三傑」に数えられています。特に薩長同盟の締結や江戸城の無血開城を含む戊辰戦争の指揮、岩倉使節団外遊中の留守政府の陣頭指揮など、その功績は計り知れないものがあります。

私たちは「明治維新」と一言でいいますが、江戸時代と明治時代では大きな違いがあります。その一つは、封建社会から資本主義社会への変貌です。千年以上、領土を基に主従関係を保ってきた封建社会から脱却して、廃藩置県を行い、身分制度を撤廃しました。

このような大改革には当然のように抵抗もありました。旧藩主を含む士族たちにとっては身分剥奪と同様の処遇で、各地に不平不満が渦巻きます。改革の最中の明治四（一八七一）年十二月から明治六年九月にかけて、明治政府の主要メンバーが「岩倉使節団」を組織して欧米を訪問しますが、その間も大きな反乱は起きませんでした。

これは筆頭参議であった西郷が、不平を唱える人々に対し誠意と論議を尽くしながらも、泰然と身を構えていたのが大きな要因といわれています。

偉人「西郷どん」

西郷と会った人の回想録を読んでみると、ほとんどが最上級の敬意を表しています。

水戸藩主・徳川斉昭の腹心といわれた儒学者の藤田東湖は「将来日本の国運を負担し得る者は、一人この快男子西郷あるのみ」と評しています。

幕臣の勝海舟は「俺はこれほどの年寄りだが、今日まで西郷ほどの人物を二人と見たことがない。西郷は大きい。また奥行きが知れない。何事も局外に超然として知らぬ風をしておりながら、よく対局を制する手腕のあったのは西郷一人だ。いわゆる天下の大事を負担するのはこの西郷だと密かに恐れた。西郷の大胆識と大誠意とには及ばない」と絶賛しています。

西郷どんと霧島

西郷は人生の中で幾度も霧島を訪れています。それにはいくつかの要因があったのではないかと思われます。

西郷の温泉好きと狩猟好きは有名で、霧島には泉質の違う多様な温泉があり、良好な猟場があることも挙げられます。天孫降臨の地で、霧島山や犬飼滝など風光明媚な自然も魅力的だったからではないでしょうか。

多事繁多な政界から離れ、心穏やかに過ごすことができた「霧島」。一五〇年前の慶応二年、坂本龍馬が刀傷の治療と幕府から逃れるために妻のお龍と霧島に訪れたのも西郷の勧めでした。

〝西郷どん〟と龍馬。二人の心休まる地が霧島であったことは、私たちにとって非常にうれしいことではないでしょうか。

（文責＝鈴）

※藩邸の庭の番人である一方、直接藩主と話すことができる秘書役のような側面もあった。